ウィンディゴ
―神話と人格変容の間―

Windigo: Between Myth and Personal Transformation

木村　武史
KIMURA Takeshi

Abstract

This paper attempts to examine the symbolic representation of Windigo, the cannibal monster, feared by the Algonquian people such as the Anishinabe and the Cree in the Northeastern North America. The first section introduces the topic. The second section, mainly based upon recent scholarly work by S. Smallman, reviews a history of the scholarly works on Windigo and presents the perspective to be taken for this paper. In the third section, it examines the historical changes of the Windigo images. As the historical phenomenon, the so-called Windigo Psychosis ceased to be reported by the end of the 19th century. The image of Windigo continues to be referred to by both the native people and the American-Canadian people. While this paper recognizes the contemporary native representation of Windigo as a proof of cultural creativity, it also sees historical changes in the religious perception of the image of Windigo with the recognition of etymological resemblance between the indigenous terms of owl and Windigo. In the fourth section, while admitting the importance of the moral interpretation of Windigo narrative, this paper tries to read the bodily experiential dimension as the location of religious fear of Windigo. Paying a special attention to the shamanistic narrative of Windigo, this paper attempts to read the religious meaning of personal transformation induced by the spiritual possession by Windigo.

Key Words：Windigo, Algonquian, cannibalism, myth, bodily experience
キーワード：ウィンディゴ、アルゴンキアン語族、食人、神話、身体的経験

Ⅰ．はじめに

異文化にはしばしば自文化の視点からは直ちには理解し難い宗教実践や宗教的表象がある。そのような宗教的表象の一つに北米先住民族のアルゴンキアン語族に伝えられているウィンディゴ（ウェンディゴ、ウィティゴ、ウィティコ）がある[1]。ウィンディゴは恐ろしい姿をしており、人

1　ウィンディゴの呼び名は地域、部族によって異なる。本論では良く知られているウィンディゴを共通の呼び名として仮に用いることとする。

間を食らうという。ウィンディゴが恐ろしいのはそれだけではない。真冬の最中、食糧が十分にない時、ウィンディゴに取り憑かれた人はウィンディゴになってしまい、人を食べたくなってしまうという。このような神話上のウィンディゴの影響のもとで人格が変容してしまう症例は「ウィンディゴ症候群」として知られている。

神話的怪物としてのウィンディゴはともかくとして、カンニバリズムが「野蛮」・「未開」の象徴の一つとして否定的意義をもって語られていた過去から、北米先住民の特定の部族と関連付けられている「ウィンディゴ症候群」を歴史的事実として語ることについては最近では慎重にならざるを得ない。時代は少し遡るが、1980年代初めにウィンディゴの歴史性の当否を論ずるために歴史資料を検討した上で、L・マラノは歴史的事実としての「ウィンディゴ症候群」を否定した（Marano 1982）。マラノ以降、ウィンディゴ症候群の事実性をめぐっての議論は続いているが、それとは異なるレベルで、特定の民族集団に結び付けてカンニバリズムを論ずることの倫理性も考慮する必要がある。例えば、S・スモールマンがウィンディゴを研究するにあたってのアドバイスを求めた非先住民出自のカナダ人人類学者が、北米先住民の文化を軽蔑するために用いられてきた表象を改めて取り上げることに激怒して、反対したという逸話は（Smallman 2015）、北米社会におけるこの表象の否定的・両義的な位置を良く表している。このカナダ人人類学者の憤りには、アメリカ・カナダ社会においてカンニバリズムという表象が否定的な意味を持って捉えられており、しかもそれが他者である先住民に、特にアルゴンキアン語族に限定的に結び付けられて用いられてきたことへの反省も含まれているといえる。

実際、アメリカ・カナダ社会の大衆文化には、グレイース・L・ディロンが指摘しているように、他者である先住民に関連付けられた負の記号としてのウィンディゴの様々な表象がある（Smallman 2015）。古くは1894年のメアリー・H．ケイサーウッドの『新世界における聖カスタンの追跡と他の物語』に所収されている「ウィンディゴ」、ハワード・ノーマンの『寒気はどこから来るのか？クリー・インディアン物語と旅路』（1982年）、ジョン・ロバート・コロンボの『ウィンディゴ：事実とファンタジー作品集』（1982年）などがある。また、映画の題材にもなり、ラリー・フェッセンデンの『ウェンディゴ』（2001年）などがある。これらアメリカ・カナダ大衆文化の一部にウィンディゴが受容されたのには、先住民社会とアメリカ・カナダ社会との長い文化交流があったことは確かであるが、しかし大衆文化におけるウィンディゴ表象は先住民社会の神話的表象とは別の問題として考える必要がある。それゆえ、本論ではアメリカ・カナダの大衆文化の中の「ウィンディゴ」は取り上げないこととする。

他方、北米先住民の研究の文脈とは異なるが、カンニバリズムについては長い間、人類学的研究で取り上げられてきている。特に、制度化された儀礼的カンニバリズムの研究は多くなされている（Sanday 1986）。しかしながら、キリスト教宣教と植民地主義が拡散する過程で成立した非西洋・非キリスト教社会が文化的・宗教的に「より劣っている」証拠としてのカンニバリズムは、近代西洋社会の自己肯定的であり、かつ近代西洋社会の暴力性を隠蔽する機能をも果たしていたともいえ、単純に考えることができない問題を含んでいる。ブラジルの人類学者E・ヴィヴィイロス・デ・カストロが最近論じているように（カストロ、2015）、食人の表象は西洋文化

のナルシスト的人類学的フィクションの中で友ではない敵に付与された否定的な記号であるという論点も重要な論点であると思われる。南米と北米における「先住民」文化の現在的状況と先住民宗教の学問的研究の社会・文化的位置の相違も考慮に入れる必要があるが、ウィンディゴ表象を取り上げるにあたっては示唆的であるといえる。カストロは人類学をマイナーな知と位置付けているが、本論では、人類学的研究の意義を十分認めながら、宗教学の観点から神話表象としてのウィンディゴを取り上げてみたいと思う。

以下、第２章では、ウィンディゴ研究の概要と本論の視点を、第３章では、アルゴンキアン語族の伝承の中でのウィンディゴ表象とその道徳的説明について、第４章では、ウィンディゴの神話とそこに語られている人格変容の歴史的変遷、ウィンディゴの身体的経験の次元、そして、その宗教的意味について取り上げることにする。

Ⅱ．ウィンディゴ研究概説と本論の視点

ウィンディゴが関係するアルゴンキアン語族の研究は数多くあり、また、その宗教に関する研究もメディヴィヴィンについてのW・J・ホフマンによる古典的な研究を始めとして、数多くある（Hoffman 1891）。ここでは全てを取り上げる余裕がないので、ウィンディゴ研究に絞って、その先行研究を概観してみる。

１．先行研究

ウィンディゴの研究は、その特異性から割と長い研究の歴史がある。民族学的記述の記録は17世紀まで遡ることができるが、ここではまず今までの研究史の概略を簡単にまとめてみることにしたい（Smallman 2010：571-596）。

1920年～30年代には、ウィンディゴ症候群は心理学的に異常な行動であるとの観点からフロイトの理論に基づく解釈がなされていた。その後、1956年の博士論文でN・I・テイチェーはウィンディゴ症候群を示した70以上の事例をまとめ、その民族誌的資料を詳細に検討したところ、ウィンディゴ伝承の信条がいかにこれらの人々の内的経験の理解に重要な役割を果たしているかを指摘している（Teicher 1956）。テイチェーの影響のもと、1960年代になると、アルゴンキアン語族の文化に特有の心理疾患と見なす視点から文化が如何に心理的病気の形成に影響を及ぼすかという点に焦点を当てて取り上げられるようになった。しかしながら、そのような観点は、歴史的条件を考慮に入れない非歴史的なアプローチであるとして、疑問が投げかけられるようになり、毛皮交易が生み出した飢餓状況と社会構造の崩壊のポストコロニアルな状況によって生み出されたのがウィンディゴ症候群であるという論が展開された。

1970年代になると、機能構造主義的説明とは異なる次元の説明が導入されるようになった。それは環境的・経済的要因によるというものであり、ウィンディゴ症候が食べ物（栄養）が与えられることによって治癒されたという事例を説明するものであるという。R・D・フォゲルソンはウィンディゴ症候の中でも食べ物が与えられたために治癒した事例があることから、文化・心

理的要因よりも経済的・栄養学的要因で他の人間を食べ物と見なしてしまうという見解を提示した（Fogelson 1965）。神話的表象の社会的機能の観点からではなく、環境的・物質的文脈の中にウィンディゴ変容とされる事例を位置づけ、食料不足と飢餓状態の栄養失調の状態が外界の認識の変容を引き起こすとした。V・ロールも食べ物が与えられ治癒された事例を取り上げ、栄養学の観点から論じた（Rohrl 1970）。もし文化的要因によるのではなく、経済的・栄養学的要因によって引き起こされるのであるとすれば、文化的優劣の価値判断とは無関係である。同様に、T・ヘイは、ウィンディゴ症候は心理的に逸脱した行為であるが、その衝動は制度化された食人儀礼と共有されるものであると論じている（Hay 1971）。

20世紀を通じても民族誌的なウィンディゴ伝承の収集の研究もずっと続いていた。ウィンディゴ症候を示さない普通の人がどのようにウィンディゴを語るのかを検討しているJ・A・パレデスは、孤児であった女性が夢でウィンディゴを見たという話と伝承との間の相互関係を論じている（Parades 1972：97-116）。そこではこの女性の人生経験を考慮する必要性を指摘しつつ、同時にアルゴンキアン族の文化的人格の特性についても考える必要があると論じている。

1980年代の初め、L．マラノは、ウィンディゴに関係する民族学誌的史料を詳細に検討した結果、ウィンディゴ症候とされる人物は実際には存在しなかったとし、ウィンディゴ表象は社会の周縁の人物、精神疾患の人物、疎外された人を殺すための方便として発明され、利用されたと論じている（Marano 1982：385-397）。つまりウィンディゴになるという文化表象は社会的弱者を排除するために用いられた政治的表象であり、「ウィンディゴ症候群」として知られるような文化的特徴に起因する人格変容を起こした事例はないと論じた。マラノの議論は、1969年に既にハミルトンが論じた論点を再確認するものであるとも言えるが、この時以降、ウィンディゴ症候群の歴史的実在性を含んだウィンディゴ表象について活発な議論が巡らされている。

21世紀になってからもウィンディゴについての研究は盛んに進められている。2009年の論文でN・D・カールソンは、ウィンディゴ症候群は歴史的に事実であるが、西洋の理論を用いて解釈するのではなく、アルゴンキアン族のコスモロジーに根差した解釈が求められると論じている（Carlson 2009：355-394）。 2015年にはS・スモールマンによるウィンディゴに関する著作が刊行されている。スモールマンの研究は歴史的資料を丹念に調査し、歴史的変遷を視野に入れて取り上げている。諸先住民社会における伝承の中のウィンディゴ表象、ハドソン湾会社を始め毛皮交易に携わっていたヨーロッパ人の眼に映ったウィンディゴ、イエズス会宣教師によるキリスト教の宣教によって引き起こされた緊張とそれに付随した先住民社会内の矛盾が増加していく中でのウィンディゴ表象、ジェンダー関係や新旧の宗教的権威の衝突との関連でのウィンディゴ表象など、多様な側面に着目しながらウィンディゴ表象を論じている。先住民社会におけるウィンディゴ退治の特徴、ウィンディゴ表象の性的特徴、外部の宗教的権威の宣教師や牧師が先住民からウィンディゴであると非難されている事例、自分がウィンディゴに変わりつつあることを恐れる人が自分を殺すように周囲に頼む事例も含めて興味深い問題を提示している。また、ウィンディゴとして非難された例には女性が多く、特に年取った女性がウィンディゴとして非難された事例が多いという点も指摘している。そして、歴史的には毛皮商人による現地先住民についての

報告がなくなると、ウィンディゴの報告も次第になくなっていったという。というのも、毛皮商人の交易ポストにはウィンディゴの脅威に晒され助けを求めにやってくる人々が来ていたからである。つまり、先住民族の特徴とされるウィンディゴについての外部社会への情報の流通は、媒介者の役割を果たしていた毛皮商人や宣教師などによってなされていたことが分かる。

２．本論の視点

さて、本論のように先住民社会でもアメリカ・カナダ社会の一員でもない立場において、ウィンディゴ表象の問題はどのように位置付けることができるのであろうか。北米大陸における先住民社会とヨーロッパ社会との歴史的植民地主義下における文化接触の宗教的・文化的意味を考慮しながら、どちらも日本文化にとっては他者性を担った異文化であるという認識論的距離を意識する中で、歴史的に形成されたウィンディゴ表象の意義を読み解こうとすることに本論の試みはあるといえる。その際、安易に先住民社会の文化と宗教はヨーロッパ社会よりも理解し易いという誤った前提を持たないことが求められる。キリスト教の影響下にあるアメリカ・カナダ社会の理解が容易ではないように、先住民社会も異文化社会であり、その意味では適切な解釈学的理解の過程を経る必要がある。その際、常に理解の可能性と不可能性についても意識している必要がある。

歴史的現象としてのウィンディゴ表象を考える上では、歴史資料の限定性を考える必要があるのは確かである。しかしながら、既にスモールマンの研究が示唆しているように、多くの歴史資料が部外者の手によるものであるということから、歴史的資料の制約によって異なる文化的背景を持つウィンディゴ表象の解釈が更に制限されることについても考える必要がある。例えば、Ｒ・Ａ・ブライトマンが論じているように、ウィンディゴの歴史性を認めつつも、歴史的資料が成立した以前に既にウィンディゴ表象は生まれていたともいえる。

まず、食人怪物としてのウィンディゴは18世紀から19世紀にかけて植民者との接触の中で生じてきたというマラノがＥ・トゥッカーの研究を参照しつつ、ウィディンゴの語源は「正気を失った者」という意味での「愚か者」であろうというのに対して、ブライトマンはアルゴンキアン諸語に基づいてウィンディゴのプロト・アルゴンキアン語源を再構築したゴダードを参照し、ウィンディゴを指すプロト・アルゴンキアン語は#wi・nteko・waであり、語源的には「フクロウ」を指す語から「食人怪物」を指す語へと意味が変化していったと論じている（Brightman 1988：340-341）。そして、「フクロウ」の声は死を呼ぶという伝承、また、フクロウが小動物を狩る様と食人怪物のウィンディゴが人を襲う様の類似性等からも両者の関係性を見てとれるという。言語学の観点から更に両者の関係について考察を加えたＪ・ヒューソンは、「フクロウ」と「食人怪物」を指すプロト・アルゴンキアン語は#wi:nt-ekwe:w-aで、高次の力によって呼び出された生きものという意味で、ウィンディゴの場合は破壊的な力によって呼び出されたものを意味したのではないかという（Hewson 1992：234-235）。

これらの先行研究が示唆する諸点の一つは、1980年代初めにマラノがウィンディゴ症候群は実際になかったと主張するのは、食人という負の記号を負わされたアルゴンキアン語族からその

否定的な意味合いを取り除こうとする試みであったともいえる。当時のアメリカ・カナダ社会に向けては政治的には正しい試みであったかもしれないが、もしウィンディゴ表象が先住民の宗教的コスモロジーに根差したものであるならば、むしろ食人怪物の宗教的表象の意味とそれによって引き起こされる人格変容の恐れを、キリスト教的・世俗社会的価値に照らして評価するのではなく、歴史的文脈とその背後にある先住民宗教的世界との関連で可能な限り解釈を試みようとすることにむしろ意義はあるのではないであろうか。

以下、このような観点からウィンディゴ表象について考察を加えてみたい。

Ⅲ．ウィンディゴ表象

ウィンディゴの描写は多様であり、また、歴史的にも変遷してきている。それゆえ一般化するのは難しいが、ここでは先住民社会の中で語られ伝えられていた主要な表象を取り上げることにする。

１．ウィンディゴ表象の変遷

ウィンディゴの表象には共通性が見られるが、個別の事例で語られているウィンディゴの描写には多様な違いが見られる。ここでは最初に、自然環境の変化がウィンディゴ表象を生み出す文脈になっていたというビショップの研究を参照して、その歴史的流れの概略を見てみたい。

最も初期の記述はイエズス会士ル・ジュネの1634-35年の書簡に見られる。1660年から61年の冬にかけてのドリュエレとダブロンの報告にはより詳しく描かれており、他人を食べたいと正気を逸した者にとっては死だけが治癒方法であるとさえ書かれている。ビショップは、ヨーロッパからの植民者、毛皮商人との取引の過程で生じた自然環境の変化がウィンディゴ症候群を引き起こす背景になっているのではないかと論じている（Bishop 1975：244）。1810年以降、冬の食糧難により酷い飢饉が起き、それに起因した食人が報告されている。このような状況でウィンディゴ神話がリアリティを持って受け止められるようになり、夏の間もウィンディゴが恐れられるようになってきた。このような社会条件が整った時、実際のカンニバリズムやウィンディゴになる恐れのある人を正当性を持って殺すということが起きるようになってきたという。

ビショップによる説明の概略はウィンディゴの神話的表象についてというよりも、カンニバルをしそうになった人間についての記録を描いている。そこでは、神話的存在としてのウィンディゴがどのような姿を取っているのかはほとんど描かれていない。

では、先住民の人々が恐れている霊的存在としてのウィンディゴとはどのような姿を取っていたのであろうか。まず最初に、現代の先住民関係者はどのようにウィンディゴを表象しているのかを見てみたい。トロントのロイヤル・オンタリオ博物館の民族学部学芸員であり、チポワ族出自のバシル・ジョンストンは、アルゴンキアン語族の人々の間で宗教的力あるいは神霊的力を表すマニトウを取り上げている著作で、最初に偉大なる神霊であるキチ・マニトウを、次に母なる大地であるムズ・クミック・クアエを、それらに続いて諸々のマニトウの顕われを説明した

後、一番最後にマニトウの一つの有り方としてウィンディゴを取り上げ、次のように描写している。

「ウェンディゴは、やせ細ってガリガリしており、皮膚は乾ききり、その下から骨が浮き上がっている。中には、皮膚を突き破って骨が飛び出し、灰色の死の顔をし、眼は落ちくぼんでいるものもある。ウェンディゴはまた、墓から掘り出されたやせ細った骸骨のようである。その口はボロボロで血だらけである。腐敗した肉の膿で酷い臭いを発し、不気味で気持ち悪く、腐敗と死臭の悪臭をまき散らしている。」（Johnston 2001：221）

先住民出自の知識人であり作家の言葉であるので、このウィンディゴ表象は先住民伝統に根ざしたものであると思われるが、しかしながらこの表象はほとんど大衆文化のゾンビを彷彿させるようなものである。ウィンディゴの表象については歴史的変遷があったことが知られているが、それが先住民社会の伝承内だけで起きたのか、あるいは外部のアメリカ・カナダ社会との交流の影響も受けながら起きてきたのかは慎重に検討する必要がある。しかし、ウィンディゴ表象がアメリカ・カナダの大衆文化に取り入れられて一世紀以上経っており、先住民出自の人もそれらの影響を受けて、自らの伝統の一部の表象を変容させていくということも可能である。しかし、ここではジョンストンのウィンディゴ表象が先住民文化のものではないということを言おうとしているのではない。むしろジョンストンのこのウィンディゴ表象が形成されるまでのテクスト間の文化的翻訳の交流については詳細な研究が必要になると思われるが、ここでは深くは立ち入ることができないという点を指摘しておきたいだけである。しかしそれでもジョンストンのウィンディゴ表象を過去の描写と比べるとその特徴は明らかである。

最初に、ウィンディゴ表象の多様性を取り上げてみたい。ただし、ウィンディゴ表象の事例はかなりの数に上り、地域・時代・文脈によって多様な様相を呈している。それらの事例の詳細な説明はスモールマンの研究に譲るとして、ここでは、ウィンディゴ表象が形成された文脈に関する考察は行わず、それらについて触れるだけにしたい。これらの過去の先住民によるウィンディゴ表象と比べると、ジョンストンの描写がかなり具体性を伴っていることが分かる。

まず、ウィンディゴ表象にはバリエーションがあるが、酷い姿をした巨人であると描かれることが多い。（Graham and et al. 2007：260）。そして強調されていたのが、ウィンディゴの心臓は氷でできており、ウィンディゴを殺すためには氷の心臓を溶かさなくてはならないというものであった。ウィンディゴのその他の特徴としては、背の高い松の木を道具として使う、とても大きな足をしているなどもある。更に興味深いことに、森の中でウィンディゴ同士が出会うと、殺し合いを始め、勝った方は殺した相手を食べ尽くしてしまうという。近隣の他の部族の間で伝えられていたウィンディゴの表象は、先に挙げたフクロウとの語源的近さを彷彿させるものである。ウィンディゴは黒い皮膚をしており、年中裸で動き回り、木の枝で身体をこすり、石のように見えるようになるために砂の中で転げまわる。ウィンディゴの形相は恐ろしい。自分の唇を食べてしまったのでなくなっており、目は大きく、フクロウのように丸く、赤く染まっている。足の指

は一本しか残ってなく、手の指は熊のように尖っている、という。

ケベックのサン・モーリス河上流に住んでいたテト・デ・ブーレ族の間で伝えられているウィンディゴの声は恐ろしく雷のように轟く（Guinard 1930）。腐った樹木を食べ、沼の岸辺のコケや動物の死肉を食べるが、一番の好物は人肉である。それゆえ、夜中に森の中を歩く人は、異様な声に恐れおののく。そして、ウィンディゴは人々が集まっているキャンプに近づくと、人間の肉が食べられると喜んで心臓が高鳴るという。

クリー族には、ウィンディゴに捕まってしまった文化英雄であり、トリックスターでもあるウィサケチャクの伝承が伝えらえている。ウィンディゴはウィサケチャクを捕まえ、炎で炙って食べようと準備していた。ウィンディゴはウィサケチャクに身体の７つの部分を火で炙るために７本の大きな木を集めてくるように命じた。ウィサケチャクは泣き出したが、木を集めるしかなかった。その時、イタチがやってきた。ウィサケチャクは閃き、イタチにウィンディゴの尻の穴から体内の中に入り、心臓を噛み切るように頼んだ。イタチは言われたようにして、ウィンディゴを殺したが、血の溜まりで溺れて死んでしまった。ウィサケチャクはイタチを蘇らせ、真っ白にしたが、尻尾の先にこの冒険を忘れないようにするために黒い点をつけた。

これらの過去のウィンディゴ表象は、主に森の中でウィンディゴに遭遇するというこれらの見解に近いものといえる。

ここではジョンストンのウィンディゴ表象が過去のものと大きく異なっているがゆえに先住民の伝承文化をそのまま継承していない、ということを論ずるつもりはない。17世紀にまだアメリカ・カナダ文化の影響をそれほど受けていない時期のウィンディゴ表象と20世紀においてカナダ社会で生き、文化的多元性を標榜していたとはいえ先住民社会と文化が差別され、抑圧されてきた歴史の中でオジブエ文化を伝承し、語っていたジョンストンの世界におけるウィンディゴ表象が異なってくるのは歴史的必然でもある。ここではむしろ初期の表象では不可視的に描かれていたウィンディゴが次第に人間の身体性・肉体性の死の様相を帯びて表象されるようになったこと、それがウィンディゴ症候群が報告されなくなり、かつウィンディゴへの人格変容の否定の歴史的過程とともに起きてきたこととについて考察することが重要であると思われる。

ここで一点思い返しておく必要があるのは、ジョンストンの著作でも明らかなように、ウィンディゴはマニトウの一つの顕われであった、という点である。マニトウは欧米の民族学・人類学では良く知られた霊的な力を表わす語であり、マナとほぼ同じ意味であると受け止められていた。マニトウの一つの顕れであるウィンディゴの表象が変化してきたことは、単にマニトウとその表象形式が変化しただけなのか、あるいはマニトウそのものの意味合いや受け止められ方が変わり、それに伴い負の意味を持つウィンディゴ表象も変化してきたのか、興味深い問題であるが、本論では十分に論ずる余裕がないので、問題を指摘するだけに留めておきたい。しかしながら、狩猟による生活を送り、冬に食物が無くなる危険のある状態で語られ、経験されたウィンディゴと、同じ先住民社会であっても20世紀において狩猟採集を通じての自然・動物との密接な関係を持たなくなり、飢餓の危険がなくなった社会生活で語られるウィンディゴとは、異なる意味合いを持つようになったのではと考えることは許されるであろう。

このように考えてみると、狩猟採集生活の中で伝えられていたウィンディゴの表象は、狩猟者としての人間が狩猟されるものに転換されるという逆転の構造の中で、人間を圧倒する力としてマニトウが自然の中の諸動物や植物と極めて近い姿で現れてきているといえる。社会生活の基盤でもある狩猟の対象である動物が手に入らない冬の自然は、人間に恵みをもたらす力としてではなく、人間に災いと破壊をもたらす力として、闇の中で襲い掛かってくる。食料が足りなくなる飢餓と死の具体的体験の中から生じてくるのがウィンディゴの表象であったといえる。

さて、スモールマンによると、ウィンディゴは自然の条件や外部社会との関係の中で家族・社会関係の緊張関係や崩壊などの中から生じるとされ、そのためウィンディゴを退治する道具としてヤカンや豊饒性を著す女性の性的力などが用いられたという（Smallman 2015）。

このように見ると、上記のジョンストンのウィンディゴの表象は気味悪く、恐ろしさを感じさせるが、過去のより単純な描写の方がそれを語っていた人がウィンディゴの姿のその不可視性のゆえにウィンディゴの恐怖を緊迫感を持って感じていたことが分かる。同時に、現代アメリカ・カナダ社会では、ウィンディゴに取り憑かれてウィンディゴになるのを恐れるという証言やウィンディゴに取り憑かれてカンニバリズムに走ったという報告がなされていない状況で、ジョンストンのウィンディゴ表象が持つ意味についても考える必要がある。言い換えるならば、ジョンストンの周辺では、ウィンディゴに襲われ、食われるという恐怖を抱く先住民の宗教的世界、ウィンディゴに乗っ取られてウィンディゴになってしまい他の人を食べたいと思うようになるという恐怖心がそれほどはない中でのウィンディゴ表象であるのではないだろうか、という問題であろう。

このように考えるならば、ウィンディゴ表象の描写はより単純であったかもしれないが、その背後にある先住民の人々の神話的恐怖があった時点におけるウィンディゴの恐怖について更に考える必要がある。その恐怖は、ウィンディゴによって食べられる恐怖とウィンディゴになって人間を食べる怪物になってしまう恐怖からなる。それは人間以外のものになってしまう恐怖といえる。ジョンストンが描いているような感覚的（視覚的・嗅覚的）恐怖とは異なる類の恐れであるといえる。

２．道徳的教えとしてのウィンディゴ

クリー族やアニシナベ族のアルゴンキアン語族の先住民がウィンディゴを恐れていたのは、ウィンディゴに人間が食べられるからだけではなく、ウィンディゴの力に凌駕されたら人間が人間を食べる怪物に変容してしまうからであった。父親が家族を食らおうと襲ってきて、逃げてくる話も数多く報告されている。興味深いのは、スモールマンが報告しているように、自分がウィンディゴになってしまい人々を食べようとするのを恐れて、自分を殺してほしいと嘆願する話である。つまりここで重要なのは、圧倒的な力を持つと経験されるウィンディゴに自分自身の意識、あるいは心が乗っ取られないように抵抗しようとしている点である。これは、ウィンディゴ表象がここではフロイト的な死への衝動によって解釈するよりも、アルゴンキアン的な世界においては霊的な力であるマニトウが人間世界の重要な構成要素となっている点に注目した方が分か

りやすい。

このウィンディゴによる人格変容の神話的伝承をどのように解釈するのかは、先住民の宗教的世界をどのように考えるかと関係してくる。例えば、このウィンディゴに取り憑かれてウィンディゴになるのを恐れる伝承は、飢餓状態になっても自分自身の空腹感・飢餓感を満たすことを優先する自己中心的態度を戒める道徳的な教訓であるという見方は、広く受け入れられているとも言える。ジョンストンも「(ウィンディゴは)貪欲と自己中心的考えへの警告として機能しており、道徳的な社会行動を定義しようとする手段であった。」と述べている(Johnston 2001：237)。

このような道徳的解釈については何点か考察の必要性がある。狩猟採集社会では獲物は共有されるものであり、狩猟は自己自身のためではなく共同体のために行うものであった。それゆえ狩られた動物は共食される食べ物となる。では、ウィンディゴが襲う人間は、獲物としての人間はどうであろうか。当然ながら、ウィンディゴが食らう人間は他の人々と共に食べることはできない。それゆえウィンディゴは単に自己の飢餓感を満足させることだけではなく、獲物としての動物を共食する共同体性を否定し、分断する象徴でもある。それゆえウィンディゴ表象を社会倫理的な戒めとして解釈する見方には一理あるといえる。

だが、ウィンディゴが冬の獲物としての動物が少なくなり、共同体の存続自体が危機に瀕する時期に密接に関連していることを考えると、道徳的解釈よりももう少し踏み込むことができると思われる。貪欲と自己中心的考えを否定するということと、ウィンディゴに取り憑かれる前に自分を殺して欲しいと周囲の人に頼み、最終的には周りの人が同意し、ウィンディゴに取り憑かれるのを恐れ、殺すのとは、どのように関係づけて考えることができるのであろうか。

スモールマンが挙げている記録では、ウィンディゴに取り憑かれるのを恐れて自分を殺して欲しいと嘆願した人を殺した男性たちは特に罪悪感も何も感じていないかのようである。むしろ安堵した様子も示している。ここでマラノが指摘していたように社会的に弱い立場にあった人々を排除するために利用された正当性の根拠としてのウィンディゴ表象という見方を思い出すこともできる。(実際に何が起きたのかが不明なところでは、このような読解も可能であろう。)しかし、これらのウィンディゴに取り憑かれるのを恐れた人を殺した男性たちも同じアルゴンキアン語族の宗教的世界を共有していたとするならば、これらの男性たちも同様にウィンディゴを恐れていたといえる。そして、ウィンディゴに取り憑かれつつある男性を殺したというのは、ある意味ではウィンディゴの霊的な力をその男性に憑けたまま排除したという象徴的な意味合いをも読みとることができる。それは単にマラノ的に社会的弱者を排除したというだけではなく、ウィンディゴの霊的力をも排除したということも可能であり、その意味では宗教的世界のバランスを崩し、禁忌を破る穢れたウィンディゴを排除し、若干の均衡を取り戻そうとする試みであったともいえる。

では、ウィンディゴに取り憑かれるのを恐れ、自分を殺して欲しいと嘆願した人をどのように考えることができるのであろうか。

Ⅳ．ウィンディゴ：神話と人格変容の間

ウィンディゴ症候群とは、神話的表象の実在性を認めず、そのような架空の存在の影響を受ける、あるいは架空の存在に心が乗っ取られ人格が変容してしまうという恐れを併った誤った心理状態と見なす時に成立する概念である。しかしながら、マニトウが宗教的力として経験される世界、それは自然と社会とを含む世界であるが、そこに生きていた人々にとってウィンディゴは架空の存在ではなく、経験的に理解された神話的に実在の存在であったといえる。その霊的な力は人間よりも強い力であるがゆえにマニトウであり、人間が怖れを感じる対象でもあった。そのような力に自らの心が乗っ取られると恐れるのは宗教現象の観点からはそれほど異例なことではない。特にウィンディゴは恐ろしい北のマニトウの力の顕れであり、ウィンディゴの影響で人格が変容した事例は多く報告されている。ここでは全てを取り上げることができないので、二、三の事例だけを参照することとする。

１．ウィンディゴに変えられた女性

ウィンディゴの伝承を見れば、実は、ウィンディゴは冬の飢餓の時だけに現れるものではないということが直ちに分かる。例えば、ルース・ランデスが記録したオンタリオ州の湖畔に住んでいたアニシナベのマギー・ウィルソンから聞いた話として、次のような内容のものがある。それは結婚の破綻に関係するものといえる。ある若い夫婦がいた。しかし妻が夫のもとを去り、自分の父親のもとに戻った。夫も自分の父親のもとに戻った。ところが、この仲たがいした男女のそれぞれの父親はシャーマンであった。そのため若い男女の結婚の破綻はシャーマン同士の争いとなった。父親であるシャーマンはどちらもウィンディゴを相手に送りつけ、襲ったという話が伝えられている（Smallman 2015：37）。また、Ｃ・Ｇ・レランドが1882年から84年の間にカナダ東部でミクマックの語り手から聞いた次のような話もある。それは、シャーマンでもある男性の結婚の申し込みを受け入れなかった女性が、その男性によってウィンディゴに変えられてしまったという話である。シャーマンであるその男性は、女性が寝ている間に、何も感じなくなり、心臓が氷のように冷たくなる呪術を施した。朝、女性が目を覚めると寒気を感じ、震え、病気になった。そして、しばらくすると雪を食べ始めた。女性の母親は心配になり、なぜ雪を食べるのかと尋ねると、女性は身体の中がとても暑くて、雪を食べると身体の中で冷えて気分が良くなると答えた。次第に女性は攻撃的になり、今にも誰かを殺しそうになってきた。女性は両親に自分を殺すように頼んだ。両親と他の男たちが全部で四十九本の矢を打ち込んで、やっと女性は死んだ。両親は女性が死んだあと、言われた通りその遺体を焼いたが、心臓だけ氷の塊になって残り、解けて完全になくなるまで時間がかかった。

スモールマンによれば、家族関係、特に男女の関係がウィンディゴ表象の背景にあるというが、ここではむしろウィンディゴになりそうになっていることに気付いた女性が人を殺しそうになるので、自分を殺して欲しいと嘆願している点が重要である。先に述べた事例とともにこれらのウィンディゴの伝承が示しているのはウィンディゴの圧倒的な力である。人がウィンディゴの

力に取り憑かれると抗することは出来ない。唯一の抵抗は自分を殺し、共にウィンディゴを葬り去る方法である。女性の心臓が既に氷の塊になってしまっていたということは、身体の変容が起きてしまっていたことを示している。このウィンディゴ伝承が示しているのは、ウィンディゴは身体を変容し、その上で意識ないしは心を変容させるということである。

ここでは二つの例だけを取り上げたが、どちらも結婚という性的関係の破綻とウィンディゴが関係していることが分かる。先の述べた人間の豊饒性を表わす女性の性的力はウィンディゴを退治する力を持つという点は、ウィンディゴの死の表象とは正反対の極を示していることが分かる。

そして、この対比は氷の心臓によって明瞭に示されている。ここで先住民宗教、特に東北森林文化地域の宗教的身体論における心臓の象徴について考察を加える必要があるが、管見の限りアニシナベ、クリー宗教における心臓の象徴を特に取り上げた研究はない。また、スモールマンが収集しているウィンディゴの民族誌を見ても、特に人間の心臓を重視しているような記述も見当たらない。十七世紀以降の民族誌的資料を見ても特に心臓に言及しているものはないので、心臓、あるいは氷の心臓が指し示すところは憶測以上のことは言えない。しかしながら、幾つかの点で考えるべき特徴がある。

まず、女性が自分が殺された後は火で焼くようという指示をしたこと、肉体は燃えても氷の心臓は残っていたということ、そして、しばらくしてから解けて消滅したということの三点に直ちに気づく。第一点目は、当時の先住民社会ではまだ火葬はなかったので、普通の人間の遺体の処理とは異なる（あるいは反対の）方法でのウィンディゴの死体の対処方法である。そして、人間としての女性が殺されてもその肉体がウィンディゴに既に支配されつつあるところでは、ウィンディゴとして復活するおそれがあることを示している。本論では若干否定的に捉えているが、ジョンストンが描くウィンディゴの様相は生きた屍そのものであり、女性が殺された後でも肉体がそのままであったらウィンディゴとして復活する可能性があるため、炎で燃し尽くす、ということが求められていたともいえる。第二点目に、氷の心臓は火では溶けなかったという点である。通常の氷は火をかければ溶けるが、火で燃やされても溶けなかったということは、ウィンディゴの氷の心臓が持つ力の強さを表している。また、その冷たさは火の熱よりも強いことを示している。そして、第三点目に、火で肉体が燃やされたら氷の心臓はしばらくして解けたということは、ウィンディゴに乗っ取られかけた女性が寒いと感じていたように、肉体も冷たくなっており、それが氷の心臓を守っていたが、その防御壁がなくなったためにやがて解けてしまった、という点である。

これらの三点を考慮すると、ウィンディゴに取り憑かれると心だけではなく身体も変容すると恐れられていたことが分かる。ここで付け加えて考察をするならば、それは心（魂）と身体の関係である。このウィンディゴの死に見られる身体観・霊魂観は、ホルトクランツ以来議論されている身体霊の議論を彷彿させるし（Hultkrantz, 1987）、他の地域での死と葬送にまつわる儀礼の中で死者を埋葬した後に死者の身体霊は地上を徘徊し、幽霊になるという霊魂観をも思い起させる。

さて、ウィンディゴに取り憑かれることによる人格変容は、このように見てみると、心身二元論的な意味での心の変容に起因するというよりも、身体の変容によって引き起こされるのではないだろうかということができる。ここに先住民的な宗教的な力とは単に「形而上学的」な力ではなく、物質的次元と密接に関わって理解されていたことが分かる。それはハロウェルが「人間以外の人（other-than-human-person）」と呼んだアニシナベの存在論、あるいは分かりやすい表現では霊魂観の問題でもあるが、この問題を含めて考えると歴史的資料に記録されていたウィンディゴ表象を言語的描写を越えて、その背後の意味も改めて考え直す必要性が出てくる。

２．ウィンディゴ表象の身体経験

さて、ウィンディゴの恐怖から貪欲を押さえ、自己中心的な行動を控えようとする意識的な振る舞いの背後には、ウィンディゴに取り憑かれた場合の極めて身体的で感覚的な経験があることが、上記の議論から明らかになってきた。霊的な身体経験は、シャーマニズムでも良く散見されるものであるが、シャーマンが訓練を通じて霊的な力の抑制を学ぶのに対して、普通の人にはそのような訓練はできない。先に言及した伝承でシャーマンが女性をウィンディゴに変えたという話は興味深い。別のウィンディゴの伝承では、近づいてくるウィンディゴに気付いた一人のシャーマンがそれに対峙するために出て行き、恐ろしく冷たい風に耐えようと自分自身の霊的力に頼り、耐えることができたという話がある。

これらの伝承は以前ならば、認識上の誤謬と済ますことが出来たかもしれないが、ここ数年の南米の諸先住民のコスモロジーの研究の進展によって新たな観点が可能となっており、それらを参照することによってウィンディゴ表象を別の観点からも論ずることが可能になってきているといえる。レヴィ＝ストロースが南米先住民の神話解釈に着手し、神話の構造の解明の可能性を開いて以来、南米の諸先住民族の宗教は新しい哲学、思想を生み出す契機ともなってきた。最近でもデスコラ、カストロ、コーンなどの研究は注目に値する。北米先住民の宗教世界には南米先住民の宗教世界と共有される領域もあるので、南米先住民研究での展開を参照することは可能である。特に森の中での生き物が持つ視線、人間に向けられる視線について考える論点は意義あると思われる。しかし、ここでは紙面の都合上、詳しく論ずることができないので、カストロの議論の一部を簡単に参照するにとどめる。

カストロは、パースペクティブ主義という概念を提案しつつ、アマゾンの先住民の思考世界について、それは近代的な教育を受けた人間が行うのと同様の思考をするが、用いる概念が異なると指摘する。そして、次のように言う。

「アメリカ先住民の民族誌は、人間にせよ非人間にせよ、こうした様々なタイプのアクターや主体的なエージェント－神、動物、死者、植物、気候学的な現象、多くの場合は対象、そして人工物－が住み着く世界を記述するコスモポリタンな理論への参照にあふれている。」（カストロ2015：44-45）

「先住民についていえば、彼らは、すべての人間や人間を越えた存在、人間でない多くの主体が、まったく『彼らと同じように』思考していると思っているのだと、私は考えている。それは普遍的な参照の収斂点を表明するものではなく、まさにパースペクティブの分散化という意味での理性なのではないか。」（カストロ2015：266）

アマゾンの先住民の世界ではジャガーをはじめとし様々な動物が重要な神話論的役割を果たすが、本論のテーマであるウィンディゴとの関連で考えるならば、ウィンディゴが人間に向け、人間に恐怖を感じさせる視線の意義を改めて考え直すことを要請しているといえる。それは歴史文書の初期から描かれている人間を食べ物として見つめるカンニバルの怪物の視線である。

ここから考えられることは、フクロウとウィンディゴとが共通の源を持ち、17世紀に描写されたウィンディゴが森の怪物という様相を持っていることから、ウィンディゴ表象には暗闇の森の中で感じられた不安と恐怖の経験を含んでいると思われる。冬の食糧の少ない時期のことであり、飢餓状態における疲弊と衰弱が寄与していることは確かであろうが、ウィンディゴについては、同時に闇と厳寒の身体的経験の意味も考える必要がある。しかも、アニミスティックな自然世界の中では昼と夜とでは世界の経験の様相が異なってくることを忘れることはできない。工業化された現代世界の闇の経験を前提として、17世紀、18世紀における暗闇におけるウィンディゴの恐怖を理解することはできないのではないだろうか。

マニトウに呼び起こされ、恐ろしい巨人の姿を取って襲ってくるウィンディゴが語られる世界では人間は霊的な世界とともに自然世界の中の小さな一部でしかない。動物もハロウェルの意味での「人間以外の人（person-other-than-human）」として世界を構成している。ラトゥールのアクターには霊的な世界の存在者は含まれていないが、アルゴンキアン語族の宗教的世界では、マニトウも含め人格的・非人格的アクターとして人間社会とともに世界を構成している。それゆえ、ここではコーエンの議論が参考になる。人間社会において力の強い者が影響を他の者に行使するように、霊的な関係においても力の強い霊的存在が弱い霊的存在（ここでは人間のことを指す）に霊的影響力を及ぼすと受け止められる。オジブエ、クリーの人々にとってはマニトウは実在的に存在する力であり、経験される力であり、世界を構成する重要な一部である。それは身体的に経験される霊的力であり、単なる物語上の認識論的に誤って認知された力ではない。このように身体経験の重要性は、M・ジョンソンが論じているように、言語的意味世界を構成する際にも重要な役割を果たす（Johnson 1987）。

シャーマニズムにとって霊的な力が身体的・感覚的に経験される事実であるならば、シャーマンではない一般の人にとって、ウィンディゴの霊的力は、破壊的・否定的な力として身体的・感覚的に経験される。霊的な訓練を受けていない人にとっては人を食らおうとするウィンディゴの力は圧倒的であり、身体的にも心理的にも凌駕されてしまう。そして、家族・共同体の構成員である他の人に暴力を振るおうとする否定的存在に変えられてしまう。先に参照したウィンディゴに取り憑かれ、他の人に暴力を振るうようになる前に自分を殺すようにと嘆願した男性は、このような身体的・感覚的経験に抗っている様子を示している。それは、自身の身体に肉体化した

ウィンディゴを退治する唯一の方法である。心理学的にはこのような振る舞いは心理的に逸脱した異常性を示しているのかもしれないが、力の身体的経験という意味での宗教経験の問題としては一般的に良く見られる。肯定的な霊的力が身体と意識を支配する経験はペンテコステ派キリスト教をはじめよく知られている。ここでの問題はウィンディゴが悪しき力として顕われてくるという点である。

ここでは、17世紀から19世紀のウィンディゴの報告の背後には、先住民宗教的世界におけるマニトウの実在的力の経験があること、その次元を考慮したウィンディゴ表象の解釈が必要であるという立場から、ウィンディゴの神話と人格変容について解釈を試みてきた。では、ウィンディゴについての報告がなされなくなっている20世紀以降のウィンディゴ表象はどのように考えることができるのであろうか。従来と同様にその背後にマニトウの霊的力を想定して、解釈することができるのであろうか。ジョンストンが描写したおどろおどろしいウィンディゴについてはどのように考えることができるだろうか。

キリスト教化、世俗化の進んでいる現代アメリカ・カナダ社会においては、その影響を受けた先住民の宗教伝統も大きく変容してきている。また、1960年代以降のアメリカ・インディアン運動の影響や主権回復運動の流れの中で伝統的宗教の再評価も生まれるようになってきた。このような歴史的変化の中で、かつては恐怖を呼び起こしたウィンディゴの伝承も、一連の先住民文化の再活性化運動の担い手でもあったノーバル・モリソウーの銅版画のように芸術的表象の対象となっている。それはもはや恐怖を呼び起こすようなものとは異なり、文化伝統の中の神話的表象を視覚的に対象化し、芸術的に構成したものといえる（図１）。ジョンストンが描いたウィンディゴ表象も同様に視覚的に対象化されたものといってもよい。そのウィンディゴの身体的特徴が極めて死の雰囲気を醸し出しているのに対して、20世紀以前のようにウィンディゴの霊的力によって自らが身体的に取り憑かれるという恐れはあまり感じられない。先住民自身の手によるウィンディゴ表象のこのような変化は、これらの先住民出自の知識人、芸術家の宗教的世界が創造的に変質、変容してきたことを反映しているのではないかと思われる。必ずしも否定的に捉える必要はない。というのも、ウィンディゴに新しい宗教的生命が注入されたといえるからである。

Ⅴ．結び

本論では、北米北東部のアルゴンキアン語族の間に伝えられている食人の怪物ウィンディゴの神話伝承と、それに付随して論じられている人格変容の問題を取り上げた。アメリカ、カナダではウィンディゴを巡ってここ数年活発な議論がなされているが、一つにはウィンディゴが先住民の宗教伝統からアメリカ・カナダの大衆文化の中に受容されたこともその社会背景の一つに挙げられるかもしれない。しかし、本論ではアルゴンキアン語族に伝えられていたウィンディゴ表象に焦点を絞って、考察を加えた。

第２章ではウィンディゴ研究の大まかな流れを概観し、本論の立場を説明した。第３章では現

代のウィンディゴ表象と過去のそれらをと比べ、それらの違いを生み出している宗教的・社会的文脈の違いを取り上げ、そして、過去のウィンディゴ表象の道徳的説明を概観した。ウィンディゴの道徳的説明は今日の先住民の人々も受け入れているので、その点についても考察する必要性がある。そして、第４章ではウィンディゴ伝承の幾つかを取り上げて、シャーマニズムとの関わりのあるウィンディゴ表象、ウィンディゴになる前に自分を殺すように頼んだ人の逸話から、従来あまり目を向けられていなかったウィンディゴ表象の身体的経験の次元に目を向けた。そこから心理的レベルでの逸脱という問題よりもウィンディゴの身体的・感覚的経験の意義に目を向けることによってウィンディゴ症候群とされる現象の宗教的意義を取り上げる重要性を論じた。

今日では先住民社会でも実際にウィンディゴになったという話はもはや聞かないという。そのような状況で先住民自身によって語られ、表象されるウィンディゴの姿も変わってきている。先住民社会の宗教も多様化しており、現在的状況を一般化して語ることは危険であるが、ウィンディゴ表象には宗教的力の畏怖させる、恐ろしい力を独自の文化的表象を通して感じさせるものがある。アニシナベ、クリーの他の宗教的表象の変容の過程との関連でウィンディゴ表象の歴史的変化を考察することによって、先住民の宗教的世界の歴史的創造性は更に明らかにできると考えられる。この問題は今後の課題としたい。

参考文献

カストロ、E・ヴィヴィイロス・デ 2015『食人の形而上学：ポスト構造主義的人類学への道』檜垣立哉・山崎吾郎訳，洛北出版。（Castro, Eduardo Viveiros de 2009 *Métaphysiques cannibals: Lignes d'anthropologie post-structurale*. Presses Universitaire de France. Paris）

コーン、エドゥアルド 2016『森は考える―人間的なるものを超えた人類学』奥野克巳・近藤宏監訳，近藤祉秋・二文字屋脩訳，亜紀書房。（Kohn, Eduardo 2014 *How Forest Think: Toward an Anthropology Beyond the Human*. Berkeley and Los Angele, University of California Press）

Bishop, Charles A. 1975 "Northern Algonkian Cannibalism and Windigo Psychosis", in Thomas R. Williams (ed.), *Psychological Anthropology*. The Hague, Mouton Publishers, pp. 237-248.

Brightman, Robert A. 1988 "The Windigo in the Material World", *Ethnohistory* 35 (4) , Autumn, pp. 340-341.

――2015 "The Return of the Windigo, Again", *Semiotic Review* 2: Monsters, pp. 1-20.

Brown, Jennifer S. and Robert Brightman 1988 "*The Orders of the Dreamed": George Nelson on Cree and Northern Ojibwa Religion and Myth, 1823*. S.Paul, Minnesota Historical Society Press.

Carlson, Nathan D. 2009 "Reviving Witiko (Windigo): An Ethnohistory of 'Cannibal Monsters' in the Athapasca District of Northern Alberta, 1878-1910", *Ethnohistory* 56 (3), Summer, pp. 355-394.

Fogelson, Raymond D. 1965 "Psychological Theories of Windigo 'Psychosis' and a Preliminary Application of a Models Approach", in M. E. Spiro (ed.) *Context and Meaning in Cultural Anthropology: Essays in Honor of A. Irving Hallowell*, New York, The Free Press, pp. 74-99.

Graham, John Russel, John Coastes, Barbara Swartzentruber and Brian Ouellette 2007 *Spirituality and Social Work:*

Selected Canadian Readings. Toront, Canadian Scholar's Press.

Grim, John 1988 *Shaman: Patterns of Religious Healing Among the Ojibwa Indians.* Tulsa, Oklahoma, University of Oklahoma Press.

Guinard, Joseph E. "Witiko among the Tete-de Boule", *Primitive Man* 3 (3 /4), July and October, pp. 69-71.

Hay, Thomas 1971 "The Windigo Psychosis: Psychodynamic, Cultural and Social Factors in Aberrant Behavior", *American Anthropology* 73 (1), pp. 1-19.

Hewson, John 1992 "Owls and Windigos", *International Journal of American Linguistics* 58 (2), April, pp. 234-2.

Hoffman, Walter James 1888 "The Midewiwin, or 'Grand Medicine Society', of the Ojibwa", *Bureau of Ethnology Report* 7. Smithsonian Institute, pp.149-299.

Hoops, John W. 1978 "The Windigo: A Discussion of Its Myth and Manifestation Among Algonquian Tribes of the Canadian Woodlands" (unpublished manuscript) https://www.academia.edu/16851441/The_Windigo_A_Discussion_of_Its_Myth_and_Manifestation_Among_Algonquian_Tribes_of_the_Canadian_Woodlands_1978_(acccessed January19, 2018).

Hultkrantz, Ake 1997 *Soul and Native Americans*. Woodstock, Spring Publishing.

Johnson, Mark 1987 *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago, The University of Chicago Press.

Johnston, Basil 2001 *The Manitous: The Spiritual Word of the Ojibway*. St. Paul, Minnesota Historical Society Press.

Marano, Lou 1982 "Windigo Psychosis: The Anatomy of an Emic-Etic Confusion", *Current Anthropology* 23 (4), August, pp. 385-397.

Paredes, J. Anthony 1972 "A Case of 'Normal' Windigo", *Anthropologica*, New Series, 14(2), pp.97-116.

Rohrl, Vivian J. 1970 "A Nutritional Factor in Windigo Psychosis", *American Anthropologist*, New Series, 72 (1), February, pp. 97-101.

Sandy, Peggy Reeves 1986 *Divine Hunger: Cannibalism as a Cultural System*. Cambridge, Cambridge University Press.

Schnepp, Gerald J. 1932 "The Concept of Mana", *Primitive Man* 5(4), October, pp.53-61.

Smallman, Shawn 2010"Spirit Beings, Mental Illness, and Murder: Fur Traders and the Windigo in Canada's Boreal Forest, 1774 to 1935", *Ethnohistory* 57(4), Fall, pp. 571-596.

Smallman, Shawn 2015 *Dangerous Spirit: Windigo in Myth and History*. Victoria, Heritage House Publishing.

Westman, Clinton N. and Tara L Joly 2017 "Visions of the Great Mystery: Grounding the Algonquian Manitow Concept", *Social Compass* 64 (3), pp. 360-375.

（図１）20世紀に活躍したアニシナベ芸術家Norval Morrisseauによるウィンディゴの表象
（Glenbow Museum所蔵）

出典：The Canadian Encyclopedia. Ca. http://www.thecanadianencyclopedia.ca/en /article/ojibwa/
(accessed October 5, 2017)